

# 大学への進学が友人関係のあり方にどのような変化をあたえるか？ —高校3年生と大学1年生の比較から—

## How does the students' enrollment into a college have influences on the relationship of their friends?

—Based on the comparison between the third graders in high school and freshmen in college—

渡 辺 舞

### 【問題】

#### 第1節 青年期の友人関係の特徴

##### (1) 青年期における友人関係の意味

青年期はそれまでの児童期と比べ、親から心理的に独立し、社会や文化の影響をより強く受ける時期であり、青年期にとっての重要な対人関係のひとつは友人関係であるといえる。宮原（1995）は青年にとって友人の意味について次のような点を指摘している。まず第1に自分の不安や悩みを打ち明けることにより情緒的な安定感が得られること、第2に、自己を客観的に見つめることができるという点、第3に人間関係が学べるという点に重要な意味が存在すると指摘している。

また、人生の中で友人関係はどのように発達するかという点から青年期の友人関係の意味を伺うことができる。乾（1977）は友人関係を5つの段階で紹介している。第1段階は友人関係の存在しない乳児期の段階で「乳児の頃は子供には関心を示さない」時期である。第2段階は「生活的友人関係」である。この段階は2、3歳以降の段階であるがこの段階では、まだ心の交流が必要とされていない。第3段階は、「ギャング時代」と呼ばれる小学校3年生から中学2年生頃までの段階である。この段階では友人が重視され、一定の集合場所・遊び場所・合い言葉を用いて団結する段階

である。つづく第4段階は「意思的友人関係」と呼ばれ、具体的な1つの共同の目的に向けての行動が中軸となって友人関係ができる段階である。最後の第5段階は「人格的友人関係」と呼ばれ、自分の人生観・世界観に合った友人を求める段階である。このように友人関係には以上の5つの段階があるが、青年期にとって重要な段階は第4・5段階であるといえよう。特に第5段階は、「親友」と呼ばれる友人関係が確立される時期であり、このような心と心が通い合うような関係は生涯において継続した関係となる場合が多いとされている。このことから、青年期における友人関係はその後の人生においても重要であると考えられる。

##### (2) 青年期の友人関係における発達の变化

青年期の友人関係の重要性について述べてきたが、また一方で青年期の友人関係は、青年期の発達段階の中でも様々な側面で変化することが知られている。このような青年期の友人関係の発達の变化を取り上げた研究は多い。落合・佐藤（1996）は、中学生・高校生・大学生を被調査者とし同性の友達とのつきあい方が年齢とともにどのように変化するのかを検討をしている。それによると青年期のはじめには「浅く広くかかわるつきあい方」が多くみられ、その付き合い方は年齢と共に減っていく。反対に「深く狭くかかわるつきあい方」が年齢が増すと多くなっていくことを明らかにしている。また、各学校段階の特徴を次

のように説明している。中学生では自分と友達との間に心理的な距離をおき、まわりにあわせようとする傾向があるという。また友達にも自分を見せようとはせず、自分の本音が問われるような状況は避け、まわりと同調しようとし、まわりの友達から好かれようとしめない特徴もあるという。つまり友人関係の意味付けとして一緒にいる仲間だという認識であることを示している。高校生ではつきあい方に顕著な特徴がみられず、この結果について落合・佐藤（1996）は、高校生は青年期内における友人関係の大きな転換期であるためではないかと考察している。大学生では友人とは本音でつきあい、心をうちあげ、相互理解のできる関係としており、友達の選択を行い、単なる行動を共にする仲間ではなく、心理的な支えとなるような相手を求める特徴があることを明らかにした。榎本（1999）は中学生・高校生・大学生を被調査者とし、友人との関係について外面的な「活動的側面」と内的な「感情的側面」の2側面から性別に発達的な変化を明らかにしている。それによると、活動的側面においては、中学から高校・大学と学校の段階において、発達的な変化はみられたが、感情的側面に関しては発達的な変化があまり見られないと報告している。さらに榎本（2000）は「欲求の側面」の発達的な変化を検討している。その結果、互いの個性を尊重する欲求では学校段階が進むにつれて高まるが、その他の欲求の側面では、学校段階における変化はみられないことを明らかにしている。

### (3) 青年期の友人関係における性差

青年期の友人関係では、その発達的な変化とともに性差が存在することが様々な研究から明らかになっている。和田（1993）によると、大学生を対象とした調査の中で、友人関係の中で友人に望むものでは性差があることを指摘している。男性では、女性よりも一緒に行動するという「共行動」を重視し、女性では男性よりも悩みを打ち明けるといった「自己開示」や互いに甘えられるといった「相互依存」を重視するという。さらに、女性の方が恐怖、不安、幸福、平静な状態にあるとき

にそのような情動の状態を相手に開示するという。また、前述の友人関係の発達的な変化を明らかにした落合・佐藤（1996）では友人との付き合い方に関して女子では友人と理解し合い、共感し共鳴しあうといった関係を望んでいるのに対し、男子では、友人と自分は異なる存在であるという認識をもって友人と付き合いおうとしていることを明らかにしている。榎本（1999）の研究の中でも、発達的な変化が見出された活動的側面において、男女差があることを指摘している。男性では、中高生で、一緒に行動する「共有行動」が主であり、女性では中学生では仲がいいことを確認しあう「親密確認行動」、高校生では他者を入れない絆で関係を作る「閉鎖的行動」という行動が主であるが、大学生になると男女ともに互いの相違点を認め合い、尊重しあう「相互理解活動」へと変化していく。つまり、大学生の段階に至るまでの行動に差があるという。また、感情的側面では、発達的な変化はあまり認められなかったが、男性では、ライバル意識や葛藤が女子よりも強く、女性では信頼・安定や不安・懸念が男性よりも強く感じているという性差が存在することを明らかにしている。また榎本（2000）による欲求との関連の研究では、欲求は全般的に女性が男性より高く、友人との共有・協調の関係の中で互いに求めるものが強いという特徴があることを示唆している。

## 第2節 高校から大学への移行

### (1) 環境変化があたえる影響

近年、日本人の平均寿命も伸びてライフサイクルが変化しつつある。発達心理学の研究において人生の前期20年間に限定することなく、複雑多様に変化する後期60年を加えた全生涯過程における生涯発達心理学として最近注目されつつある。

ライフサイクルとは、ある社会において、就学年齢・学歴・結婚年齢・退職年齢・寿命といったおおよそ社会的標準と定まっているものである程度共通性をもった規則的な展開を示す。山本（1992）によると、ライフサイクルやライフコースの中で生起する変化の過程を「人生移行」と定

義し、人生の出来事や移動等によって環境が変わることを「環境移行」と定義している。人生移行には入学・卒業・就職・結婚・退職等社会の大多数の人々が経験し、本人も予期している移行と不治の病における死の宣告や愛する人の死・災害など突発的に起こる出来事がある。後者は予期できない事態であるので、一般的に本人や周りに与えるインパクトも大きいといわれているが、前者のように予期できる移行であっても、移行の前と後では大きな変化が生じるので、個人にとっては衝撃が大きいこともあるといわれている。異なる環境への移行は新しい環境へうまく適応できるか、もしくは適応に失敗して何らかの不都合な事態を引き起こしてしまうかの分岐点であり危機的な状況に陥る危険性を含んでいるといわれている。

## (2) 大学進学による生活環境と対人関係の変化

高校卒業時における進路決定は人生における最初の重要な意思決定のひとつである。現在では専門学校を含めた高等教育機関への進学率は70%程度といわれ、高校生の進路の中心が進学となっているといえる。大学への進学はそれまでの高校への進学とは違い、様々な特徴を持っているといえる。高校への進学では、ある程度広い地域のから学生が集まることで、中学との進学に比べると、変化も大きいだろうが、学力により進学先が決定されることが多く学区の制限もあるため、進路決定の選択の余地は少ない。一方で大学への進学は、学区という制限は皆無となり、今後学びたい大学を選択すること、学んでいきたいもしくは興味を持っている学部・学科を選択すること、親元からの独立をすることなど、選択の自由は一気に広がるといえ、変化も大きいといえる。このようなことから、高校生の進路選択が、その後の人生にとって重要な選択であるといえる。大学に入学することは新しい学生生活への移行という側面だけでなく、大学生活での様々な出会いや経験を通して、新環境への適応を進めながら、自分の将来を見据えた様々な葛藤を克服していかなければならないという現実がある。最近では、大学入学後の適応の問題が注目されているが、小嶋(1998)は大学

生の面接から、大学生活への適応は、入学が高校時代の希望どおりだったという側面だけでなく、友人との関係や新しい環境への積極性が大きく関わってくることを指摘している。対人関係は大学進学によって、様々な地域から学生が集まることにより、大きく変化すると予想される。高校時代までの友人と進路が違うために、疎遠になる可能性もあり、大学で新しい人間関係を築くことが重要となるだろう。古川・藤原・井上・石井(1983)は大学進学による環境移行に伴う対人関係の認知の変化を短期縦断的研究で旧環境における友人と新環境における友人の心理的距離の検討で明らかにしている。それによると旧環境に属する人々の数は緩やかに減少し、自己との距離も緩やかに離れていくこと、新環境における新しい対人関係においては入学から半年ほど経過したところから、詳しいネットワークを作り上げていくこと、また新環境移行後に旧環境に属する人々のうち、疎遠になってしまう人もいるが、残った人たちの心理的距離は変化がみられないことを明らかにしている。しかしながら古川ら(1983)の研究では、友人関係における内面的な感情の変化や具体的な行動の変化は検討されていないのが現状である。

## 【目的】

先行研究では、青年期の友人関係の重要性や発達的变化および性差については様々な検討がなされているが、進学という生活基盤の変化が友人関係に与える影響を検討する研究は少ない。

よって本報告では、これから進路の選択を決定する時期の高校3年生と大学に入学し半年が経過した大学1年生と被調査者とし、それぞれ友人関係の実情および、友人への感情・欲求・付き合い方・行動頻度といった諸側面を比較検討し、大学への進学が友人関係に及ぼす影響を探ることを目的としている。具体的な検討内容を以下に述べる。

- ① 本研究の高校3年生と大学1年生の友人関係の実情について比較検討する。
- ② 友人関係の感情・欲求・付き合い方への態度・

行動頻度といった多様な側面での指標を集約・統合し、本研究の高校3年生と大学1年生、および大学生の居住形態別に比較検討する。

③ 大学生の入学前と入学後の生活変化が友人関係に与える影響について比較検討する。

また、先の問題で述べたように、友人関係においては男女差が顕著であるため、分析は、男女別に検討することとする。

## 【方法】

### (1) 高校生に対する調査

北海道立高等学校の高校3年生135名に対して質問紙調査を行なった。そのうち高校1、2年生および回答に不備があったものは本研究の分析から除外し、有効回答数は高校3年生の128名（男性51名、女性77名、平均年齢17.30歳）であった。調査は2004年7月23日に行い、同日回収した。調査の実施は、各担任教諭に1学期最後のホームルームの時間に実施して頂くように依頼し、調査実施1週間前に質問紙を1部ずつ封筒に入れた状態で預けた。質問紙を預ける際に、実施方法に関する用紙を調査クラス分同封し、その手順にそって被調査者に教示していただくようお願いした。

実施手順は、調査用紙を入った封筒を配布したあとに、「封筒の中の調査用紙を出してください。まだ回答しないでください。」と口頭で教示した。続いて、回答および回答後の注意事項として「この調査は記入後、封筒にいれテープで封をしてから提出してもらいますので、提出した後は誰が回答したのかわからないようになっていきます。調査用紙には自分の名前は絶対に書かないようにしてください」、「質問の回答に正しい答えや間違った答えはありません。思った通りに回答してください」、「回答が終わったら、記入もれがないか確かめてから封筒に入れ、テープで封をしてください」と口頭で教示した。最後に「それでは調査用紙の左上の説明文をよく読んでから回答を始めてください」と口頭での教示後、回答してもらった。

### (2) 大学生に対する調査

北海道内私立大学の大学生207名に対して質問紙調査を行なった。そのうち大学2、3、4年生と社会人入学者および回答に不備があったものは本研究の分析から除外し、有効回答数は大学1年生の200名（男性72名、女性128名、平均年齢18.82歳）であった。調査は2004年10月4日および18日、20日に行い、その場で回収した。調査の実施は、あらかじめ各講義担当教授に調査実施を依頼し、授業開始または終了10～15分の時間を利用して、調査者が質問紙を配布した。質問紙は回答終了後、回収を行なった。

### (3) 質問紙の構成

#### ①基本的属性（年齢・性別・居住形態）

#### ②日常活動状況（部活動・アルバイト・課外活動の活動状況）

#### ③友人関係の実情（友人数・友人の所属・生活費・付き合い費・放課後に友人と付き合う時間・休日に友人と付き合う時間・友人関係の満足度）大学生に対しては、現在の状況に加え、高校時代の状況についてもあわせて回答させた。

#### ④友人獲得

小塩（1999）の「友人獲得尺度」10項目を用いて、4段階「1. そう思わない～4. そう思う」で評定させた。この尺度は「親友の獲得」と「集団の獲得」の2側面が含まれている。

#### ⑤友人への感情

榎本（1999）の作成した友人への感情を捉える「感情的側面」25項目の中から10項目を選び、4段階「1. そう思わない～4. そう思う」で評定させた。榎本は友人への感情的側面として、「信頼・安定」「不安・懸念」「独立」「ライバル意識」「葛藤」の5因子を抽出しているが、項目によっては、具体的な感情を表していないものも含まれていたため、本研究では、友人に対するポジティブ感情を表す「信頼・安定」から5項目とネガティブ感情を表す「不安・懸念」から5項目を選んだ。

#### ⑥友人への欲求

小塩（1999）の「友人への要求尺度」12項目を用いて、4段階「1. してほしくない～4. して

ほしい」で評定させた。この尺度は、普段の友人つきあいの中で、友人にどのように振る舞ってほしいかを問うもので、小塩はこの項目から「理解・評価欲求」「関与欲求」「過剰関与回避欲求」の3因子を抽出している。

⑦友人関係に関する尺度

小塩 (1998) の使用した友人関係尺度 (岡田, 1995) の項目の中から山村 (2003) が現代の高校生にも適していると採用した22項目を使用した。評定は4段階「1. そうしてない～4. そうしている」で評定させた。この尺度は、青年期の友人関係の特徴を測定する尺度で、小塩はこの項目から「気遣い」「楽しさ」「一線」「同調」「開示」の5因子を抽出している。

⑧対人行動

柴田 (1997) が作成した行動スキルのリスト36項目から25項目を選び、4段階「1. していない～4. よくしている」で評定させた。この尺度は普段の付き合いの中でどのような行動が生起するかを調べるもので「ネガティブ感情」「情緒的サポート」「自己開示」「関係開始」「衝突回避」の5つの対人課題領域に当てはまる各6項目と対人行動に重要と思われる「その他」の6項目を加えたものである。本研究では、「その他」を除いた5つの領域から現代の高校生・大学生に適していると思われる各5項目を採用した。

【結果】

(1) 高校生と大学生の友人関係の実情の比較

高校生と大学生との間で友人関係の実情に差があるかを検討するために、学校と性を被験者間要因の独立変数、友人数・入学前の友人数の人数、生活費・友人との付き合い費、友人と過ごす時間(放課後・休日)を従属変数とする2×2の2要因の分散分析を行なった。学校別および性別の平均値とSDの結果を表1に示す。

友人数では学校の主効果に有意差がみられ、( $F_{(1,292)}=8.20, p<.01$ )、高校生の友人数が大学生よりも有意に多かった。また性の主効果に有意差がみられ ( $F_{(1,292)}=3.94, p<.05$ )、女性が男性よりも友人数が有意に多かった。入学前の友人数では、学校および性別の主効果に有意な差はみられなかった。

1ヶ月に使う金額(生活費)では、学校の主効果に有意差がみられ、( $F_{(1,318)}=96.05, p<.001$ )、大学生の金額が高校生よりも有意に高かった。友人との付き合い費でも、学校の主効果に有意差がみられ、( $F_{(1,318)}=50.70, p<.001$ )、大学生の金額が高校生よりも有意に高かった。

放課後に友人と過ごす時間では学校の主効果に有意差がみられ、( $F_{(1,303)}=5.68, p<.05$ )、大学生の友人と過ごす時間が高校生よりも有意に多かった。休日に友人と過ごす時間では性で有意傾向の主効

表1. 高校生と大学生の友人関係の実情に関する平均値、SD および F 値

	高校		大学		F 値		
	男性	女性	男性	女性	学校	性別	学校×性別
友人数(人)	62.02 (74.63)	87.91 (87.44)	45.14 (47.94)	54.27 (71.10)	8.20**	3.94*	0.90
入学前の友人数(人)	29.89 (40.51)	41.52 (61.81)	25.74 (38.59)	31.09 (57.65)	1.29	1.75	0.24
生活費(円)	8050.00 (6969.50)	8131.58 (7035.80)	28478.57 (24069.41)	30873.02 (22863.76)	96.05***	0.31	0.28
付き合い費(円)	3497.96 (4210.87)	3993.33 (3428.31)	9714.29 (10059.45)	10857.14 (9099.64)	50.70***	0.80	0.12
付き合い時間(放課後：時間)	1.80 (2.16)	1.41 (1.10)	2.11 (1.68)	2.11 (1.86)	5.68*	0.86	0.85
付き合い時間(休日：時間)	4.46 (2.92)	5.22 (2.05)	4.47 (4.78)	5.36 (4.68)	0.02	2.84+	0.02

( ) は SD \*\*\* p < .001 \* p < .05 +p < .10

果がみられ ( $F_{(1,298)}=2.84, p<.10$ )、女性が男性よりも休日に友人と過ごす時間が多い傾向がみられた。

## (2) 友人関係のあり方の各尺度による因子分析

友人関係の多様な側面での指標を集約・統合するために、友人獲得・感情・欲求・友人関係の態度・行動頻度の各尺度および友人満足度の全80項目に関して因子分析を行なった(主因子法,プロマックス回転)。因子負荷が.35以上、および2つの因子において.30以上の負荷にまたがらない62項目において解釈を行い、8因子を抽出した(表2・3参照)。その結果、第1因子は友人への信頼や心を許せる存在の獲得を示す「信頼の感情と親友の獲得 ( $\alpha=.93$ )」、第2因子は友人に対する積極的な態度や行動を示す「積極的関わり ( $\alpha=.90$ )」、第3因子は友人に対して一線を引き、気を使う態度である「消極的關係維持 ( $\alpha=.84$ )」、第4因子は友人に対して評価や関与を求める欲求である「評価・関与欲求 ( $\alpha=.88$ )」、第5因子は、グループ行動への重視と集団の所属を示す「友人グループへの所属 ( $\alpha=.87$ )」、第6因子は友人に対して積極的な拒絶の行動を表す「ネガティブ行動 ( $\alpha=.74$ )」、第7因子は友人への不安な感情を示す「不安な感情 ( $\alpha=.83$ )」、第8因子は過剰な関与を拒否する欲求を示す「過剰関与回避欲求 ( $\alpha=.76$ )」とした。各因子はほぼ十分な信頼性を示した。尚、以下の分析に関しては、友人獲得・感情・欲求・友人関係の態度・行動頻度の各尺度の評定値が4件法、友人満足度の評定値は5件法と一定でないため、8因子について、因子得点をそれぞれ算出し、使用した。

## (3) 高校生と大学生の友人関係のあり方の比較

高校3年生と大学1年生の友人関係のあり方の諸側面を比較するために、学校・性を被験者間要因の独立変数、友人関係の8因子の因子得点をそれぞれ従属変数とする $2 \times 2$ の2要因の分散分析を行なった(表4参照)。

その結果、「信頼の感情と親友の獲得 ( $F_{(1,320)}=11.63, p<.01$ )」・「友人グループへの所属 ( $F_{(1,320)}$

$=10.21, p<.01$ )」・「過剰関与回避欲求 ( $F_{(1,320)}=10.07, p<.01$ )」の3因子で学校の主効果が見られ、いずれも、高校生の因子得点が大学生の得点よりも有意に高かった。また、「信頼の感情と親友の獲得 ( $F_{(1,320)}=18.85, p<.001$ )」・「積極的関わり ( $F_{(1,320)}=16.13, p<.001$ )」・「評価・関与欲求 ( $F_{(1,320)}=3.92, p<.05$ )」・「友人グループへの所属 ( $F_{(1,320)}=13.71, p<.001$ )」の4因子で性の主効果が見られ、女性の因子得点が男性の得点よりも有意に高かった。さらに、「ネガティブ行動 ( $F_{(1,320)}=3.72, p<.10$ )」・「過剰関与回避欲求 ( $F_{(1,320)}=4.90, p<.05$ )」でも性の主効果が見られ、男性の因子得点が女性の得点よりも有意に高かった。

## (4) 大学生の居住形態別および高校生との友人関係のあり方の比較

大学生の居住形態と高校生との間で友人関係のあり方の諸側面に差があるかを検討するために、居住形態(親と同居・非同居・高校生)・性を被験者間要因の独立変数、友人関係の8因子の因子得点をそれぞれ従属変数とする $3 \times 2$ の2要因の分散分析を行なった(表5参照)。

その結果、「信頼の感情と親友の獲得 ( $F_{(2,305)}=7.41, p<.01$ )」・「友人グループへの所属 ( $F_{(2,305)}=5.21, p<.01$ )」・「過剰関与回避欲求 ( $F_{(2,305)}=5.01, p<.01$ )」の3因子で居住形態の主効果が見られ、Bonferroni法による多重比較を行なったところ、「信頼の感情と親友の獲得」・「過剰関与回避欲求」では、高校生の因子得点が大学生の同居している群の得点よりも高く、「友人グループへの所属」では高校生の因子得点が大学生の同居している群・大学生の非同居群の得点よりも高かった。大学同居群・非同居群の比較ではいずれの因子得点にも有意な差は見られなかった。

表2. 友人関係のあり方の尺度の項目内容

	1	2	3	4	5	6	7	8
<b>第1因子：信頼の感情と親友の獲得</b>								
一生付き合っているような友人ができた	.874	-.186	-.062	.105	.070	.029	.006	.091
友人と心から理解し合えるようになった	.869	-.054	-.003	-.014	.075	.077	.059	.065
お互いに信頼できる友人ができた	.855	-.062	.033	.004	.115	.021	-.000	.128
心から友達を親友といえる	.751	-.062	.040	.015	-.182	.018	.046	-.170
言いたいことが何でも言い合える友人ができた	.743	-.022	-.144	.002	-.085	.138	.017	.093
友達を信頼している	.711	.118	.064	.049	-.052	-.085	-.054	-.114
悩みを話し合えるような友人ができた	.708	.073	-.114	.052	.086	-.009	.102	.134
友達とは気持ちを通いあっている	.661	.097	.137	.036	.046	-.146	-.011	-.129
友達は私を絶対に裏切らないと思う	.551	.034	.176	-.035	-.062	.002	-.071	-.224
自分は、友達に充分受け入れられていると思う	.510	.140	.294	-.012	-.099	.027	-.182	-.156
友人満足度	.466	.022	-.083	-.086	.268	.016	-.165	-.019
<b>第2因子：積極的関わり</b>								
手助けする	.015	.803	-.032	-.187	.018	.093	.108	.053
一緒に考える	.020	.785	.030	.008	-.047	-.020	-.007	-.054
相手の立場に立って考える	-.027	.762	.028	-.101	.020	-.082	.131	-.001
話を聞く	-.012	.711	.056	.060	-.071	-.139	-.024	.023
アドバイスする	-.160	.693	.010	.157	.025	.093	-.073	-.005
自分の間違いを認める	-.027	.662	.124	-.055	.091	.012	-.053	-.049
元気づける	-.017	.633	.007	.026	.037	.053	-.054	.101
話しかける	-.121	.511	-.069	.124	.199	.012	-.096	-.200
あやまる	.021	.500	-.030	-.112	.070	.233	.215	.104
真剣な議論をする	.099	.446	-.083	-.043	-.198	.310	-.133	.100
自分の恥を打ち明ける	.077	.421	-.126	.155	-.021	.242	-.032	-.114
自分を犠牲にしても相手につくす	.162	.385	.188	-.045	-.096	.159	.116	.042
電話やメールをする	-.006	.369	-.052	.114	.091	.041	-.049	-.108
心をうちあけて話をする	.278	.363	.035	.163	-.071	.115	-.079	-.226
<b>第3因子：消極的関係維持</b>								
お互いのプライバシーには入らない	.111	.035	.728	-.051	-.092	-.224	-.048	.208
相手の言うことに口をはさまない	.149	.122	.709	-.048	-.097	-.192	.057	.073
お互いの領域にはふみこまない	.063	-.013	.671	-.114	-.044	-.067	.032	.137
まじめな話題にならないように気をつける	-.028	-.125	.599	-.093	.081	.300	.070	-.068
突然まじめな話をして友達をしらけさせない	-.092	-.074	.598	.038	.232	.050	-.040	.094
相手に甘えすぎない	-.069	.250	.537	.057	-.004	-.311	.041	.114
意見や好みがあつからないように気をつける	.035	-.070	.492	.073	.070	.263	.056	-.024
当りさわりのない会話ですませる	-.091	-.077	.440	-.027	.084	.191	.109	.295
話題についていけるように気を使う	-.063	-.008	.381	.151	.226	.151	.037	-.160
<b>第4因子：評価・関与欲求</b>								
もっと、私を信頼してほしい	.148	.055	.008	.807	-.122	-.189	.076	.110
もっと、私の良さを分かってほしい	-.081	-.005	.013	.783	.004	.038	.026	.228
もっと、私の気持ちを理解してほしい	.002	.117	-.068	.750	-.015	-.147	.141	.039
もっと、一緒に遊んでほしい	.112	-.136	-.094	.714	.015	.053	.016	-.136
もっと、私のすることに協力してほしい	-.095	.015	.023	.658	.083	.083	-.072	.257
もっと、私を高く評価してほしい	.005	-.094	-.029	.598	-.042	.206	.067	.085
もっと、色々なことを話し合いたい	.104	.089	-.033	.571	.000	-.107	.037	-.047
<b>第5因子：友人グループへの所属</b>								
みんなと一緒にいることが多くなった	.086	.015	-.026	-.039	.809	-.072	.088	-.084
グループでいろいろなことをするようになった	.093	.060	-.082	-.064	.763	-.046	-.021	-.007
たくさんの友人と一緒に遊ぶようになった	.138	-.026	-.063	-.039	.719	-.025	.022	.061
友人グループの一員となった	.251	.001	.031	-.085	.698	-.064	.029	.035
みんなと一緒にいる	-.199	.142	.181	.131	.666	-.048	-.083	-.054
一人の友達と特別仲良くするよりグループで仲良くする	-.080	-.125	.174	.035	.575	.092	-.052	-.041
たくさんの人と知り合いになった	.233	.182	-.093	-.011	.421	.029	.012	.137
<b>第6因子：ネガティブな行動</b>								
自分を売り込む	.030	-.057	.045	-.004	.003	.684	.012	.044
非難（批判）する	-.004	.071	-.031	-.012	-.100	.620	-.021	.177
自己主張する	.002	.202	-.244	.019	.025	.532	-.058	-.033
無視や軽蔑に対して抗議する	.069	.158	.029	-.057	.033	.509	.065	.051
怒りや不快感を伝える	-.076	.113	-.155	-.067	.027	.469	.116	.072
拒否する（イヤという）	.094	.026	-.044	.004	-.063	.368	-.085	.206
<b>第7因子：不安な感情</b>								
友達と意見が違くと不安になる	-.029	.011	.122	.010	.067	-.022	.747	-.220
友達に裏切られるのではないかと不安になる	-.027	.009	.054	-.032	-.011	.082	.728	.075
自分が本当に友達と思われているか気になる	.008	-.041	.033	.107	.009	-.114	.680	-.066
友人の考えていることがわからなくなって不安になる	-.054	.131	-.034	.168	.017	-.049	.632	-.008
友達が自分の知らない友達と話しているのを見て寂しくなる	.047	-.142	.000	.104	-.124	.237	.535	-.180
<b>第8因子：過剰関与回避欲求</b>								
私が考え事をしているときには邪魔しないでほしい	-.093	-.027	.211	.150	.129	.112	-.168	.682
あまり、私のすることに口出ししないでほしい	.041	-.055	.163	.204	-.037	.120	-.058	.676
もっと、私を一人にしてほしい	-.035	.057	.174	-.044	-.232	.284	-.038	.511

表 3. 友人関係のあり方の尺度の因子相関行列

因子	1	2	3	4	5	6	7	8
1	1.000							
2	.552	1.000						
3	-.126	.000	1.000					
4	.236	.414	.248	1.000				
5	.452	.439	.190	.356	1.000			
6	.129	.350	.259	.385	.357	1.000		
7	-.064	-.016	.286	.390	.151	.241	1.000	
8	-.298	-.236	.086	-.051	-.158	-.067	.222	1.000

表 4. 大学生と高校生のと友人関係の因子得点の平均値と F 値および SD

	高校		大学		F 値	
	男性 n=46	女性 n=76	男性 n=72	女性 n=130	学校	性別
信頼の感情と親友の獲得	-.04 (.98)	.38 (.83)	-.48 (1.06)	.06 (.90)	11.63**	18.85***
積極的関わり	-.28 (1.21)	.12 (.87)	-.30 (.94)	.19 (.86)	.04	16.13***
消極的関係維持	.20 (1.15)	-.01 (.87)	-.08 (.84)	-.02 (.94)	1.76	.39
評価・関与欲求	-.05 (1.17)	.11 (1.02)	-.22 (.95)	.08 (.80)	.79	3.92*
友人グループへの所属	-.02 (.92)	.34 (.76)	-.41 (.99)	.04 (.97)	10.21**	13.71***
ネガティブ行動	.22 (1.07)	-.10 (.90)	.05 (.81)	-.05 (.91)	.26	3.72+
不安な感情	.02 (1.07)	.21 (.94)	.03 (.90)	-.14 (.86)	2.42	.01
過剰関与回避欲求	.39 (.83)	.08 (1.12)	-.02 (.69)	-.17 (.83)	10.07**	4.90*

( ) は SD \*\*\* p&lt;.001 \*\* p&lt;.01 \* p&lt;.05 +p&lt;.10

表 5. 居住形態別友人関係の因子得点の平均値と F 値および SD

	男性			女性			F 値		居住形態の多重比較
	同居 n=56	非同居 n=15	高校生 n=46	同居 n=98	非同居 n=20	高校生 n=76	居住形態	性別	
信頼の感情と親友の獲得	-.60 (.99)	.05 (1.19)	-.04 (.98)	.08 (.91)	.13 (.75)	.38 (.83)	7.41**	9.34**	同居<高校
積極的関わり	-.31 (.88)	-.27 (1.19)	-.28 (1.21)	.17 (.88)	.24 (.75)	.12 (.87)	.07	12.13**	
消極的関係維持	-.08 (.83)	-.15 (.90)	.20 (1.15)	-.00 (.94)	-.07 (.92)	-.01 (.87)	.98	.01	
評価・関与欲求	-.24 (.91)	-.18 (1.15)	-.05 (1.17)	.08 (.77)	.07 (1.01)	.11 (1.02)	.41	3.22+	
友人グループへの所属	-.42 (.95)	-.41 (1.17)	-.02 (.92)	.07 (.89)	-.07 (1.15)	.34 (.76)	5.21**	9.55**	同居・非同居<高校
ネガティブ行動	.11 (.84)	-.20 (.69)	.22 (1.07)	-.08 (.85)	.09 (1.10)	-.10 (.90)	.22	.35	
不安な感情	.01 (.88)	.02 (1.01)	.02 (1.07)	-.07 (.87)	-.34 (.78)	.21 (.94)	1.41	.43	
過剰関与回避欲求	-.04 (.64)	.06 (.91)	.39 (.83)	-.15 (.77)	-.21 (.88)	.08 (1.12)	5.01**	3.54+	同居<高校

( ) は SD \*\*p&lt;.01 +p&lt;.10



### (5) 大学生の居住形態と高校時代と大学時代の活動状況(部活動・アルバイト・課外活動)が友人関係に与える影響

大学生の居住形態と高校時代と大学時代の活動状況(部活動・アルバイト・課外活動)が、友人関係の実情と各因子へ与える影響の強さを検討するために、現在の居住形態・過去と現在の活動状況を説明変数、友人数・付き合い時間(放課後・休日)・生活費・付き合い費および、友人関係の8因子の因子得点を基準変数とする数量化I類を行なった(表6参照)。

説明変数の居住形態は、「親と同居」「一人暮らし」の2カテゴリー、部活動・アルバイト・課外活動に関してはI群「高校活動→大学活動(高校・大学を通して継続中)群」、II群「高校非活動→大学活動(進学を境目に活動形態が変化した)群」、III群「高校活動→大学非活動(進学を境目に活動形態が変化した)群」、IV群「高校非活動→大学非活動(高校・大学を通して活動していない)群」の4カテゴリーに統合した。尚、活動状況に関しては、進学による活動の変化の状況を正確に捉えるために、質問紙上の「時々活動している」「途中でやめた」の不定期な活動形態を示す項目を選択した被調査者は分析対象外としたため、79名が分析対象者となった。

友人数では、アルバイト(偏相関:0.34)・居住形態(0.33)の影響が大きくなっている。アルバイトではI・II群の現在活動群の重み数量が正の値に、III・IV群の現在非活動群が負の値になっていることから、現在アルバイトをしていることが、友人数の多さに影響を与えているといえる。居住形態では、一人暮らし群の重み数量が正の値に、親と同居群が負の値になっていることから、一人暮らしをしていることが友人数の多さに影響を与えているといえる(図1参照)。

友人との付き合い時間の中で、放課後では部活動(0.27)の影響が大きくなっている。I・II群の現在活動群の重み数量が正の値に、III・IV群の現在非活動群が負の値になっていることから、現在の部活動をしていることが放課後の付き合い時間の長さに影響を与えているといえる。休日では

居住形態(0.36)の影響が大きくなっている。一人暮らし群の重み数量が正の値に、親と同居が負の値になっていることから、一人暮らしをしていることが休日の友人と過ごす時間の長さに影響を与えているといえる(図2・3参照)。

生活費では居住形態(0.67)、アルバイト(0.41)の影響が、また付き合い費では、アルバイト(0.41)の影響が大きくなっている。一人暮らし群の重み数量が正の値に、親と同居群の値が負の値になっていることから、一人暮らしをしていることが生活費の金額に影響を与えているといえる。またアルバイトではI・II群の現在活動群の重み数量が正の値に、III・IV群の現在非活動群が負の値になっていることから、現在アルバイトをしていることが、生活費と付き合い費の金額の大きさに影響を与えているといえる(図4・5参照)。

第1因子「信頼の感情と親友の獲得」では、部活動(0.39)の影響が大きくなっている。I・II群の現在活動群の重み数量が正の値に、III・IV群の現在非活動群が負の値になっていることから、現在部活動をしていることが信頼の感情と親友の獲得の強さに影響を与えているといえる。(図6参照)

第2因子「積極的関わり」では部活動(0.40)、アルバイト(0.33)の影響が大きくなっている。部活動ではI・II群の現在活動群の重み数量が正の値に、III・IV群の現在非活動群が負の値になっていることから、現在部活動をしていることが積極的関わりに影響を与えているといえる。アルバイトでは、I群の高校・大学を通して活動継続中の重み数量のみが正の値になっていることから、高校・大学とも活動を継続していることが、積極的関わりの強さに影響を与えているといえる(図7参照)。

第3因子「消極的関係維持」では、部活動(0.37)の影響が大きくなっている。IV群「高校非活動→大学非活動」の重み数量が正の値で、最も高い値を示している。このことから、高校・大学を通して活動していないことが消極的関係維持の強さに影響しているといえる(図8参照)。

第4因子「評価・関与欲求」では部活動(0.37)の影響が大きくなっている。Ⅰ・Ⅱ群の現在活動群の重み数量が正の値に、Ⅲ・Ⅳ群の現在非活動群が負の値になっていることから、現在部活動をしていることが評価・関与欲求に影響を

与えているといえる(図9参照)。

第7因子「不安な感情」では、課外活動(0.36)の影響が大きくなっている。Ⅰ群の高大継続活動群の重み数量のみが負の値になっている。このことから高校・大学とも課外活動を継続している

表6. 居住形態・活動形態別の偏相関係数

	居住形態	部活動	アルバイト	課外活動	重相関係数
友人数	0.33	0.21	0.34	0.17	0.47
付き合い時間(放課後)	0.04	0.27	0.15	0.21	0.36
付き合い時間(休日)	0.36	0.18	0.14	0.11	0.40
生活費	0.67	0.12	0.41	0.23	0.70
付き合い費	0.23	0.28	0.41	0.20	0.48
因子1(信頼の感情と親友の獲得)	0.11	0.39	0.17	0.11	0.42
因子2(積極的関わり)	0.02	0.40	0.33	0.15	0.46
因子3(消極的関係維持)	0.04	0.37	0.23	0.11	0.45
因子4(評価・関与欲求)	0.11	0.37	0.22	0.25	0.45
因子5(友人グループの所属)	0.04	0.28	0.16	0.16	0.38
因子6(ネガティブ行動)	0.06	0.21	0.20	0.05	0.25
因子7(不安な感情)	0.08	0.20	0.12	0.36	0.39
因子8(過剰関与回避欲求)	0.03	0.15	0.15	0.16	0.25

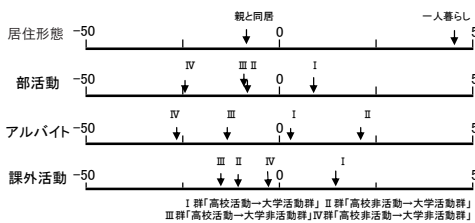


図1. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別友人数の重み数量

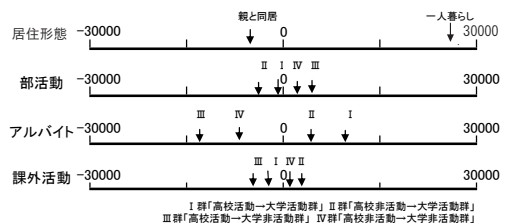


図4. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別生活費の重み数量

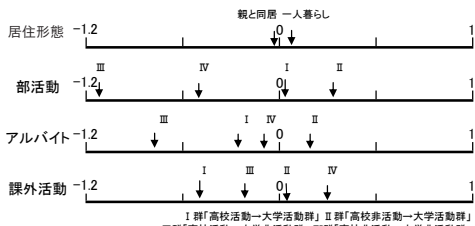


図2. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別付き合い時間(放課後)の重み数量

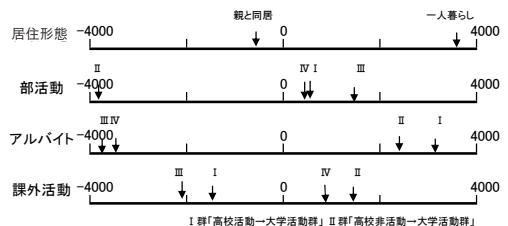


図5. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別付き合い費の重み数量

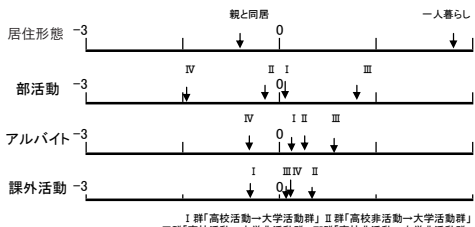


図3. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別付き合い時間(休日)の重み数量

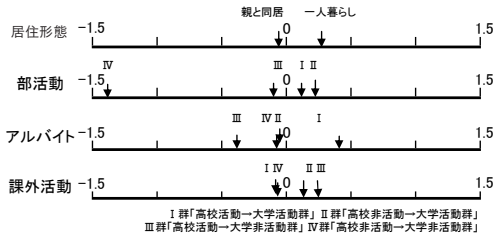


図6. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別  
 因子Ⅰ（親友の獲得と信頼の感情）の重み  
 数量

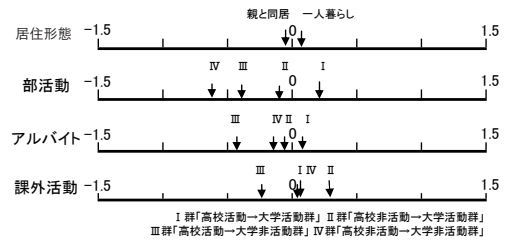


図10. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別  
 因子Ⅴ（友人グループへの所属）の重み数量

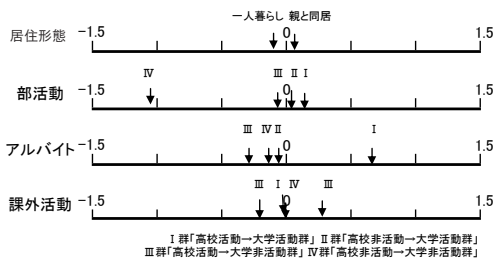


図7. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別  
 因子Ⅱ（積極的にかかわり）の重み数量

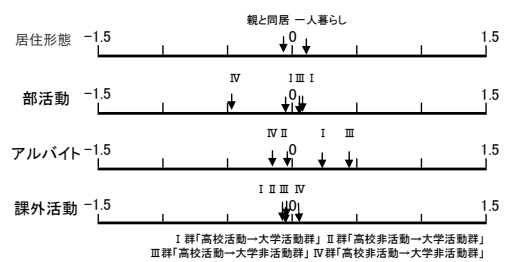


図11. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別  
 因子Ⅵ（ネガティブ行動）の重み数量

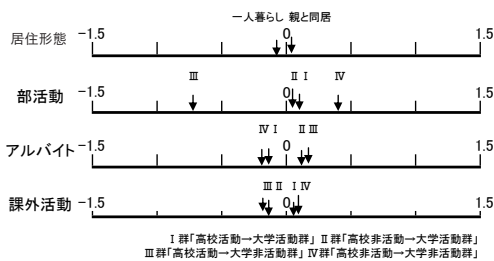


図8. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別  
 因子Ⅲ（消極的關係維持）の重み数量

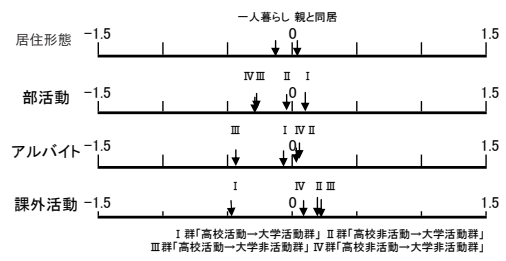


図12. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別  
 因子Ⅶ（不安な感情）の重み数量

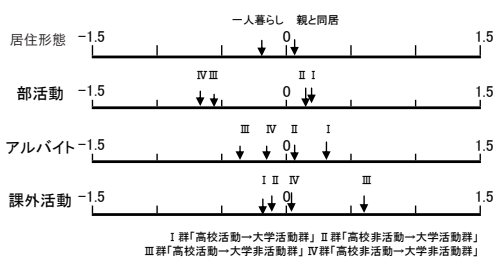


図9. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別  
 因子Ⅳ（評価関与欲求）の重み数量

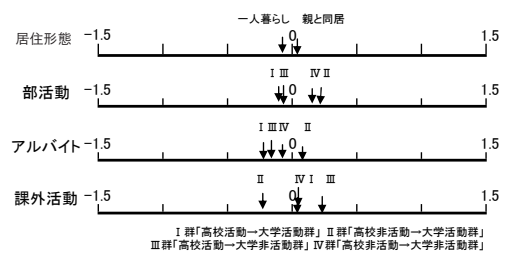


図13. 数量化Ⅰ類における居住形態・活動形態別  
 因子Ⅷ（過剰関与回避欲求）の重み数量

ことが不安な感情の弱さに影響を与えているといえる（図12参照）。

第5因子「友人グループへの所属」・第6因子「ネガティブ行動」・第8因子「過剰関与回避欲求」では影響の強い説明変数は見られなかった（図10・11・13参照）。

## 【考察】

### (1) 高校生と大学生の友人関係の実情

高校3年生と大学1年生の友人関係の実情の比較では、友人数は大学生になると減少するにもかかわらず、友人との交際に使えるお金の額は増加し、また友人との交際に使う時間は増加する。このことが意味することは、1) 高校生から大学生になると、それまでの友人関係から離れて、新たな友人関係を構築し始めていること、2) 生活の中で友人との関わりがより中心になることと、お金も時間も自分の必要に応じて使うことができるようになってきていること、すなわち生活が外側からの枠によってではなく、自らの統制によって営まれるように変わっていることと考えられる。つまり、未成年といえども、大学生になるということで、自らの時間や行動の選択の自由が増える。大学進学によってそれまでの友人に対する行動の金銭的・時間的基盤も変化していくことを示唆するものであろう。

こうした特徴においては、男女差はなく、男性も女性も、大学への進学は自らの生活を自らが仕切りながら、生活の中核となる新たな友人関係を形成してゆくという変化をもたらすものであるといえよう。

### (2) 友人関係のあり方の諸側面の構造

さて、本報告では、友人関係に関する5尺度17因子と友人満足度の全80項目について因子分析を行ったところ集約された8因子が抽出された。各尺度の評定対象が「思っているー思っていない」「してほしいーしてほしくない」「しているーしていない」等、異なっている複数の尺度の項目をまとめて因子分析を行ったのは、別々の尺度に属す

る項目同士であっても、必ずしも独立していない可能性を考慮したためであり、本研究の被調査者の友人関係のあり方をそれぞれ既存の尺度の枠にとらわれず構造を明らかにするためであった。

第1因子「信頼の感情と親友の獲得」は、榎本（1999）の「信頼・安定」の感情と小塩（1999）の「親友の獲得」の2側面を統合した項目で構成されている。いずれも、友人との強いつながりを確信する程度を示す項目内容で構成されていた。おそらく青年期特有の友人を求める強い希求が、信頼できる友人は親友としてとらえ、信頼できない友人を親友にたる存在とは認めないという結びつきを生みだしていることが推測される。第2因子「積極的関わり」は柴田（1997）の行動スキルのリスト5領域のうちネガティブ行動を除く4領域の各項目と、小塩（1998）の友人関係尺度の中で「気遣い」「開示」の1部の項目が統合された項目で構成された。これらは、友人との関係の中で、積極的な行動の頻度を示す項目内容であり、第1因子との因子間相関が高い（.552）ことから、友人関係への強い希求を反映しつつも、感情と行動が区別されて捉えられていることを示している。ポジティブな関係の中での積極的行動の程度を示すと解釈されよう。第3因子は「消極的関係維持」は、小塩（1998）の友人関係尺度の中で「一線」と「気遣い」の1部の項目が統合された項目で構成された。小塩（1998）は「一線」の因子の解釈についてあまり他者と交わらないお互いに深いところまで立ち入らないといった友人関係のあり方と解釈しているが、本報告では、これらの因子に友人からの評価を気にし、お互いに気を遣い、深い関係になることを避けていると小塩（1998）が解釈した「気遣い」をも含んだ構成となった。少なくとも本研究では、友人を気遣うことが、友人との間に距離をおくことと同じ意識を意味することが示された。第4因子「評価・関与欲求」は、小塩（1999）の欲求尺度3因子のうち、「理解・評価」と「関与」の2因子が統合された内容で構成された。相手に関わる相手はいい相手、関わりたくない相手はよくない相手という意識のあり方が示されている。ポジティブで積極的な側面を求

める項目内容といえる。第5因子「友人グループへの所属」は、小塩（1999）の「集団の獲得」と小塩（1998）の友人関係尺度の「同調」の2因子が統合された。すなわち、高校生・大学生においては、友人グループに所属することが、その仲間と同調することと同義であるという捉え方をしていることが考えられる。これらは、一人の特定の友人との関係ではなく、友人グループとしての所属の程度と集団での行動頻度を示す項目で構成されているといえる。第6因子「ネガティブ行動」は柴田（1997）の「ネガティブ行動」の5項目全てと「自分を売り込む」という「関係開始」の項目で構成された。自分を売り込むという自己主張的な行動が、ネガティブな行動であると捉えられていることが示されている。積極的な行動の中でも親しい友人であっても自己主張や拒否をする行動頻度を示す項目内容であるといえる。第7因子は「不安な感情」は榎本（1999）の「不安・懸念」の5項目が、また第8因子「過剰関与回避欲求」は小塩（1999）の「過剰関与回避欲求」3項目がそれぞれの因子で独立に抽出された。

このように見てくると、友人関係にかかわる欲求・感情・行動は、関係面で積極的に友人関係を信頼し獲得しようという傾向と、距離を置いて気を使う傾向、過剰関与回避、グループに溶け込んで同調するという4側面、行動面でネガティブとポジティブの2側面、友人に対する評価と不安という2側面から構成されているとみなすことができる。

### (3) 高校生と大学生の友人関係のあり方

「信頼の感情と親友の獲得」「友人グループへの所属」で高校生の得点が有意に高かったことは高校生活の3分の2以上を経過し、友人関係も安定した時期と思われる高校3年生と生活環境が変わり友人関係もこれから充実させていくであろう大学1年生での比較であったため、高校生の方が友人に対し、信頼の感情を持ち、友人の獲得状況も上回ったと結果だといえる。一方で、「過剰関与回避欲求」の得点でも高校3年生が大学1年生よりも得点が高かったことは、今回の被調査者の

うち90%以上が進学希望しており、まさに受験シーズンを迎えることから、進路を考える際に、友人による過剰な関与を拒否したいという気持ちが大学生よりも強く現れた結果と考えられる。これを大学生の側から見てみると、新たな友人関係を構築しつつあるが、高校時代ほど強い友人への希求を意識してはおらず、かといって関与することを回避しようともしていないという、高校時代とは違った友人関係へのあり方を経験しているように見える。

友人関係のあり方に関する8因子の性差についてまとめて考察する。

「信頼の感情と親友の獲得」・「積極的関わり」・「評価・関与欲求」・「友人グループへの所属」では、女性の因子得点が男性の因子得点よりも有意に得点が高かった。本報告で友人数で女性の方が男性よりも友人が多いという結果や先行研究においても和田（1993）は女性の方が男性よりも自己開示すること、相互依存することを同性の友人関係に望んでいること、また落合・佐藤（1996）は女子では、友人と理解し合い、共感し共感しあうといった関係を望んでいることを明らかにされている。このことから本報告において得られた女性が友人関係のポジティブな感情や積極的なかわり、および、評価や関与を求める傾向が男性よりも強いという結果は、先行研究での友人関係の性差の結果を支持したものといえよう。

落合・佐藤（1996）によると、男性では、「自分に自信を持って交友する自立した付き合い方」が女性よりも多く見られた結果を取り上げて、この考察として、男性は他者と自分がそもそも異なる存在であること認識している場合の付き合い方であり、よって意見がぶつかっても傷ついたり、自信を失ったりしないと考察している。本研究で女性よりも男性が相手に対して否定的に行動する傾向をもち、かつ、相手へ必要以上の関与を避ける傾向を示している。このことは、落合・佐藤（1996）のいう「自分に自信をもって」交友することは示していないが、少なくとも、男性が自他との距離を置きやすいこと及びぶつかることも辞さないという可能性が示唆される。

#### (4) 居住形態別および高校生との友人関係のあり方

居住形態の比較では、大学生の居住形態に差が見られなかったことから、「(3)高校生と大学生の友人関係のあり方」で述べた高校生と大学生の比較とほぼ同様の結果となった。少なくとも、大学生になると、高校生の時と友人関係の持ち方が変化するという点においては、親と同居しているかどうかは、大きな違いを生じないと考えることが出来る。すなわち、居住形態よりも、大学生として生活をしていることが、友人関係のあり方に影響を与えているのであろう。

#### (5) 大学生の居住形態と高校時代と大学時代の活動状況（部活動・アルバイト・課外活動）が友人関係に与える影響

大学1年生の居住形態と高校時代と大学時代の活動形態状況（部活動・アルバイト・課外活動）が、友人関係の実情と各因子へ与える影響の強さを検討した。

居住形態は、友人数・友人との付き合い時間（休日）・生活費・付き合い費といった友人関係の実態の側面に影響を与えるが、友人関係のあり方の諸側面には影響を与えないことが明らかになった。大学生の友人関係のあり方は、親元から通っているかどうかによって左右される性質のものではないことが示されたわけである。

他方、部活動は、放課後の付き合い時間が短くなる、あるいは大学から部活を始めた者は、友人との付き合い費が少なくなる等の友人との生活のあり方にある程度影響を与えている。しかし、この要因の特徴は、友人関係のあり方に影響を与えている点にある。特に高校時代も大学時代も部活をしていない群が、「親友の獲得と信頼の感情」「積極的にかかわり」「評価・関与欲求」で低く、「消極的関係維持」で高いウェイトを示しており、この群が友人関係でも消極性であることを際立たせている。大学生になって部活動を開始した群は、ほぼ一貫して高校時代から部活を行っている群との友人関係のあり方において差はなく、また、大学では活動を辞めた群も、「評価・関与欲求」

で低いのが目立つ程度である。高校時代から一貫して部活動にかかわらない群が、友人関係でも一般的に消極的である理由については、更なる検討が必要と思われる。

アルバイト活動の有無が、友人数・生活費・付き合い費に影響することについては、十分予想されることであった。アルバイト活動で活動の範囲が広がるとともに友人数が増え、得た収入で、生活費への使い方や広がっていく友人との付き合い費に影響を与えるということは、アルバイト活動が、大学生生活の経験のひとつというだけでなく、学校生活以外の対人関係を持つという経験や生活において金銭的な自由を得て、生活の質の幅を広げるものだといえよう。それだけでなく友人に対する積極的にかかわり因子に影響を与えている点について考えてみたい。結果からわかることは、部活動の影響が、活動していない群において顕著に現れているのに対し、高校時代からアルバイトを続けている群のみが、友人と積極的にかかわろうとする姿勢が強いということである。ここから、特に高校時代は、部活動を行うことのほうが一般的であるのに対し、アルバイトについては、それを行わないほうが一般的であるのかもしれない。それに加えて、大学時代も続けるという姿勢に、友人関係への関わり方の積極さと繋がる要因が潜んでいると推測されるが、この点の検討も課題となる。

最後に課外活動では、高校時代から課外活動を続けている群のみが友人関係のあり方の中で「不安な感情」を持ちにくいことが示された。部活以外のボランティア等の活動に参加し続けることが、友人関係での不安を低減することについて、より詳細な検討が必要である。

#### 【今後の課題】

本報告では、高校3年生と大学1年生を被調査者として、大学への進学が友人関係の諸側面に与える影響を検討した。高校生から大学生への移行の影響をより明らかにするためには同被調査者による縦断的な研究も必要であり、さらに、高校か

ら大学への生活全般の変化をより厳密に捉えた上で友人関係のあり方への影響を検討する必要があると考える。

## 【付記】

本論文は2004年度北星学園大学社会福祉学部福祉心理学科において卒業論文として作成したものに加筆、修正を加えたものです。論文の一部は第46回日本社会心理学学会（2005）にて発表いたしました。本論文をまとめるにあたり、熱心なご指導・多くのご助言をいただきました今川民雄先生に厚く感謝申し上げます。また、卒業論文作成の際には、研究のはじめから終わりまで柴田利男先生に同じく熱心なご指導をいただきました。厚く感謝申し上げます。

## 【引用・参考文献】

- 会沢勲・石川悦子・小嶋明子編，1998，移行期の心理学－  
こころと社会のライフイベント－，ブレーン出版，  
115-146
- 榎本淳子，1999，青年期における友人との活動と友人に対  
する感情の発達の变化，教育心理学研究，第47巻，  
180-190
- 榎本淳子，2000，青年期の友人関係における欲求と感情・  
活動との関連－，教育心理学研究，第48巻，444-453
- 榎本淳子，2003，青年期における友人関係の発達の变化－  
友人に対する活動・感情・欲求と適応，風間書房
- 古川雅文・藤原武弘・井上称・石井真治，1983，環境移行  
に伴う対人関係の認知についての微視発達の研究，心  
理学研究，第53巻，330-336
- 乾考，1977，仲間づくりの心理学－友情成熟の過程，青年  
心理，4，17-26
- 宮下一博，1995，青年期の同世代関係，講座生涯発達心理  
学第4巻 自己への問い直し－青年期，金子書房，  
155-165
- 宮下一博，1999，友人関係とアイデンティティ発達，発達，  
ミネルヴァ書房，49-53
- 岡田努，1993，現代青年の友人関係に関する考察，青年心  
理学研究，第5巻，43-55
- 岡田努，1995，現代大学生と自己像・友人像に関する考察，  
教育心理学研究，第43巻，354-363
- 岡田努，1999，現代大学生の認知された友人関係と自己意  
識の関連について，教育心理学研究，第47巻，432-  
439
- 小塩真司，1998，青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係  
のあり方との関連，教育心理学研究，第46巻，280-  
290
- 小塩真司，1999，高校生における自己愛傾向と友人関係の  
あり方との関連，性格心理学研究，第8巻，1-11
- 落合良行・佐藤有耕，1996，青年期における友人とのつき  
あい方の発達の变化，教育心理学研究，第44巻，55-  
65
- 柴田利男，1997，様々な対人課題領域とそれに対応する行  
動スキルの検討－対人課題領域の特定と行動スキル・  
チェックリストの構成，原子力安全システム研究所研  
究報告
- 和田実，1993，同性友人関係，その性および性役割タイプ  
による差異，社会心理学研究，第8巻，67-75
- 山本多喜司・S. ワップナー編著，1992，人生移行の発達  
心理学，北大路書房
- 山村貴人，2003，青年期の対人行動における感情と行動，  
北星学園大学卒業論文

